

ヤニス・クセナキスの打楽器作品の分析  
打楽器作品のマクロフォームとそれらを形作る構成要素  
An analysis of Iannis Xenakis' Percussion Works  
Macroforms of His Percussion Works and Their Components

悪原 至 AKUHARA Itaru

本論文は、ヤニス・クセナキス（1922-2001）の作曲した打楽器作品の分析を主意としている。クセナキスは打楽器を用いて様々な特徴をもつリズムのテクスチュアを生み出しているが、そのどれもがクセナキス特有のものであり、他の作曲家の作品には感じることのできない類のエネルギーや、構造の剛健さといったものを感じさせる。クセナキスが作曲活動を行っていた頃は、前衛的な音楽が盛んに作られた時期であり、多くの作曲家により、打楽器を主体とした作品が生み出された時代でもある。筆者も打楽器奏者としてその時代の多数の作品の演奏、聴取を行った経験がある。打楽器の多彩な音色を活かした作品や、特殊奏法を駆使した作品など、趣向を凝らした作品も数多くある中で、クセナキスの作品のもつ力強さや一つ一つの音の説得力は群を抜いており、打楽器らしさを最も引き出しているように感じるが多かった。一般的にクセナキスの作曲技法というと、確率論など高度な計算を駆使しているイメージが強いが、このような魅力は計算に由来するものなのだろうか。この疑問を抱きながらクセナキスについて調べているうちに、「私がいつも計算尺を使っているように見えるかもしれないが、そうではない。時々私は事物を組織化するのに計算をしなければならないが、それを成し得たときには計算を忘れ、とても自由な気分になる。」というクセナキスの言葉に行き当たった。その言葉を発見したとき、やはり計算のみに頼っていたわけではなかったのだと思う気持ちとともに、では計算ではないとしたら、何を拠り所とし音楽を構成したのだろうかという新たな疑問が生じた。

その疑問を解くべく、クセナキスの打楽器作品の分析を行った。分析対象を打楽器作品としたのは、クセナキス作品の持つ力強さは、音の時間的配置、すなわちリズムの側面に顕著に表れているのではないかと感じたからである。クセナキスの研究者として知られるマクス・ソロモスは、クセナキスの音響を「グリッサンドの音響」、「静的な音響」、「点の音響」の3つのカテ

ゴリーに分類した。そのうちの3つ目に挙げた「点の音響」はポリフォニーを突き詰めて発展させたものであり、クセナキスによる打楽器作品の大半のテクスチュアはこの音響に当てはまると言える。クセナキスの打楽器作品では、特定のピッチを有さない皮膜打楽器の使用が非常に多く、「グリッサンドの音響」と「静的な音響」はそれぞれメロディーとハーモニーを成熟させたものであり、ピッチの存在は外すことのできない要素だからである。それゆえに、「点の音響」に特化したクセナキスの打楽器作品を分析対象とすることは、クセナキスの用いるポリフォニーに関してのより深い理解につながるに違いない。このような観点から、本論文ではクセナキスが打楽器のみを用いて作曲した作品を分析対象としている。それは、打楽器独奏曲の《Psappa》、《Rebonds》、そして打楽器アンサンブル曲の《Persephassa》、《Pléiades》、《Okho》の5曲である。いずれの作品も、クセナキスのスケッチのコピーをマキ・クセナキスの運営するクセナキス友の会 (Asslciation des amis de Xenakis) より入手することができ、必要に応じて参照しながら分析を行っている。

クセナキスの打楽器作品の先行研究に目を向けてみると、《Persephassa》や《Psappa》のように先行研究がいくつかあるものもあるが、クセナキスの計算を用いた作曲技法にフォーカスしているものが多い。特定の部分の作曲の過程に目が向けられがちで、その結果が表すものに対しての分析は手薄であり、作品全体を分析したものはほとんどない。また、複数の打楽器作品について取り上げたものは確認することができなかった。

以上のことを踏まえ、本論文では先行研究には不足している2つの視点からの分析を行っている。

まず一つ目は、それぞれの打楽器作品のマクロフォームに対する分析である。マクロフォームとは、それぞれの作品の全体や特定のまとまりをもった部分を巨視的な視点から観察した際のビジョンである。クセナキスの友人であるオリヴィエ・レヴァルト・ダロネスによると、“全体的な光景”という概念がクセナキスの脳裏を離れなかったようだ。この“全体的な光景”は作品の細かいパーツや部品をみるだけでは味わえないものであり、その個々の要素の集まりを一つの構造物として見ることにより初めて感受できるものではないだろうか。

そしてもう一つの視点は、マクロフォームを形作る構成要素に対する視点である。本論文での構成要素とは、巨視的な視点から俯瞰されたテクスチュアに対し、それがどのように構成されているのかという微視的な視点から観察した際に明らかになる一つ一つの要素である。それは、各声部の音型に現れる特徴や、その重ね合わせ方、アクセントの配置など、様々なレベルにおいて

現れる。総じて言えることは、それらの構成要素を組み合わせ、巧みに配置することにより、特徴的なテクスチャが築き上げられ、特異な音響効果が生み出されているということである。

本論文は、上記の2つの視点に基づき、第一部「クセナキスの打楽器作品のマクロフォーム」、第二部「打楽器作品のマクロフォームを形成する構成要素」と大きく2つに分かれている。

第一部では、クセナキスの打楽器作品の分析を年代順に行った。1章《Persephassa》、2章《Psappa》、3章《Pléiades》、4章《Rebonds》、5章《Okho》となっている。各作品とも、そのマクロフォームを把握できるように、複数の部分に分割して分析を行っている。分割した部分ごとに分析を加えていくことにより、作品全体を余すことなく考察することができ、計算により作り上げられた特徴的な部分のみに着目してしまうことを防ぐことができる。これまでの先行研究で網羅されていなかった部分をも包括的に取り扱うことができ、本論文はまさしくクセナキスの打楽器作品の全体像を照らし出すものなのである。

6章では1~5章での分析を踏まえたうえで、5つの作品のマクロフォームの比較を行った。マクロフォームの比較から、作品全体の統一をもたらす要素が内包されていることなど、各作品に共通するクセナキスの作品の特徴が見えてきた。また、作曲の時期の違いによるマクロフォームの変遷も明らかになり、そのことが各作品の個性を際立たせる一因となっていることも明らかになった。

そして第二部では打楽器作品のマクロフォームを形成する構成要素に対する分析・考察を行っている。それらはクセナキスの打楽器作品の根底にある潜在的な語法となり、作品の魅力を下支えしている部分である。

7章ではクセナキスが用いた音型の特徴を、最小音価、IOI、音高の3つのパラメータから読み解いた。クセナキスの作品は様々な作曲手法が用いられているが、聴いているとそのどれにもクセナキスらしさを感じる。そのクセナキスらしさはどこに起因するものか探ったところ、クセナキスの使用する音型には上記の3つのパラメータが関わっており、そのパラメータの扱いにより8種類の特徴があることが確認できた。

続く8章では、複数声部によるリズムの多層構造の特徴を分析している。クセナキスは7章により明らかになった特徴的な音型を積み重ねることにより、様々なリズムの多層構造を作り上げている。ここでは、各声部の最小音価に注目し、それぞれの最小音価の相違の有無等により多層構造を分類し考察している。多層構造における各声部の最小音価の違いは、それぞれの音型のビ

ートのテンポの相違に直結している。そしてクセナキスはそのビートのテンポの違いから、音の銀河や、音の雲とも呼ばれる音群構造を生み出している。これは最もクセナキスらしさが表れている書法の一つであり、この音群構造に関しては7章で用いた3つのパラメータを用いて重点を置いて説明を行っている。

9章は、アクセントについての考察を主に行っている。クセナキスの打楽器作品ではアクセントのある部分とない部分が明確に分かれており、そのアクセントの現れる部分においては、アクセントに明確な役割がもたらされていることが多い。それは新たなリズムパターンを生み出す役割と、特定の事象を強調する役割である。クセナキスの言及からもアクセントに関するこだわりは見ており、アクセントに込めた意図を探っていく。

10章は群論やふるいの理論などの数学の知識や、古代ギリシャの詩の韻律に基づいて作られた音型に関する考察を行っている。これらはいずれもクセナキスの知識をもとに作り上げられたものである。計算によらないクセナキスの魅力を探る本論文の目的から外れているようにも捉えられるかもしれないが、クセナキスが数学の理論から生み出した音型は、それぞれが一定の特徴を持っている。そしてその特徴を基に、主観的に計算したかのように模して音型を構成することがある。ここでは、クセナキスの計算が音型の構築にどのように関わっているかを探ることのみではなく、それによって生成された音型にはどのような特徴があり、それが作品の中でどのように活かされているのかといった点にも着目し考察を加えていく。

本論文での2つの視点からの分析により、クセナキス作品の計算以外のいくつもの特徴が明らかになった。マクロフォームの分析からは、各作品の統一を図る要素の内包など、全体を意識したクセナキス作曲の手法が明らかになり、構成要素の分析からは、3つのパラメータにより規格化された音型の組み合わせから、多様なテクスチュアが生み出されていることが分かった。これらのことに鑑みると、クセナキスは作曲に際し、マクロフォーム、いわば設計図を先に作り上げて、それを基に規格化された音型、パーツを巧みに配置し、様々な特徴を持つテクスチュアを作り上げたのではないかと予想できる。そして計算はそのパーツを生み出す過程やその配置を効果的なものにするために主に使用されている。

では計算がこのように部分的な使用にとどめられているとすれば、クセナキスの作品をクセナキスたらしめているのは何なのだろうか。筆者は、分析を進めていくうちに、構造の明確さと際立ったコントラストにあると考えるようになった。それは音型やテクスチュアの特徴、作品全体の構造とあらゆるレベルにおいて当てはまる。明確な構造と鮮明なコントラストは、音の打点が

明確である打楽器の特性と相性がよく、相乗効果を生み出し、クセナキスの打楽器作品を唯一無二のものへと成し得ている。